

## ノートルダム大聖堂の火事によせて

大ローマ布教所長  
山口 英雄 Hideo Yamaguchi

## ノートルダム大聖堂の火事によせて

4月15日の夕刻、まだ日が残り明るい中、フランス・パリの中心部にあるシテ島のノートルダム大聖堂に火の手が上がり、大きな教会が炎に包まれてしまった。教会を象徴する尖塔は96メートル、重量は750トン、それが燃えて半分に折れて、崩れおちた。

大聖堂の工事は1163年に始まり、2世紀以上の月日を費やして完成した。時はバロック時代の始まりだった。大聖堂はパリのシンボルであり、フランス人の誇りでもあるが、世界からの旅行者、巡礼者で、いつも多くの人で溢れていた。年間の訪問客は1,200万人、エッフェル塔に次いで2番目になる。また、カソリック教会への訪問客の数では、ヴァチカンのサン・ピエトロ教会について2番目に多い。教会には計113のステンドグラス装飾の窓がある。教会の入り口の正面の円形バラ窓は、直径9.7メートルあり、他の二つの大きな円形バラ窓は、ゴシック後期の作品で、直径13メートルある。 Hammondオルガンは焼けずに助かったが、焼けた高さ96メートルの尖塔は、檜の木で作られており、それを鉛の板が覆っていた。これが火事の時の白い炎の元になったようだ。教会ではシンボリック儀式も行われ、例えば1804年にはナポレオンの戴冠式、ナチの支配からパリを解放する祈りも行われた。1945年には第2次世界大戦勝利を祝う式典会場となり、戦後はドゴール、ポンピドゥー、ミッテラン各大統領の国葬会場としても使われた。

ノートルダム大聖堂は、われわれのからだの一部でもあり、われわれの記憶の一部が燃えたのと同じようなものだと告白する者もいる。多くの人には涙を流しつつ、大聖堂の無事を祈った。多くの美術品が傷つくことなく、無事に運び出され、ルーブル博物館に運び込まれて、保存されることになった。

ローマ法王フランチェスコより、パリの大司教ミシェル・オーベティ氏に見舞状が送られた。「全フランス人の悲しみと同様に貴殿の悲しみに私も同じ思いです。皆の努力で再興できるでしょう。市の精神的中心であり、信仰の証として復元することでしょう。」

フランスの精神を癒し、信仰心を取り戻すため、ノートルダム大聖堂は再建に向けて、すぐに動き出した。復興・再建のための基金はすぐに集まり出し、また多くの大企業からも寄付金が寄せられた。フランス国としても、マクロン大統領は5年以内に復元すると宣言した。しかし専門家は、現代の技術、機械力を使っても復興には5年以上はかかると言っている。さらに復興は火災以前の元通りにするのか、また少しは変形するのかという問題が残っている。特に倒れた塔の部分をどうするのかというのは大きな問題である。出火の原因についても捜査が進められている。ノートルダム大聖堂は、ヴァチカンの聖ペテロ教会同様、テロの攻撃目標の一つに挙げられていた。2016年9月には、未然に防ぐことができたが、ISIS(イスラム国)の女性5人による自爆攻撃が計画されていた。しかし、現在はこの類の危険性はなくなっていた。それゆえに火災の原因は、屋根を修理するために必要だった電気回線による漏電だったのか、修理作業員の使用した火の不始末が原因だったのだろうか。

ノートルダム大聖堂の火事は、ローマの四大教会の一つ聖パオロ教会の大火事を思いおこさせる。聖パオロ教会は1823年7月15日の夜に、天井修理のために使っていた火の残り火の不始末によって火災が起きたのだ。焼け残ったのは、教会正面の一部、大アーチ、袖廊、

回廊のみだった。復元のための工事費の寄進を募ったところ、多額の金銭のみならず、エジプトの副王はアラバスター石を、ロシアのニコライ2世はクジャク石を寄贈してきた。修復、復旧工事には1世紀以上の時間がかかり、1928年に完成した。付け加えると、イグナティウス・デ・ロヨラはこの教会の「秘跡の礼拝堂」の前で、1541年にイエズス会を結成したのだ。

聖エジディオ共同体の創始者、アンドレア・リッカルディは、ノートルダム大聖堂の火災に寄せて、次のような談話を発表している。

「今回の火事には驚いた。しかし大聖堂は永遠のものではない。シンボリックだが、今日の火事は、フランスのみならず全世界の教会の脆弱性を表しているのだ。今日のノートルダムの一部の損壊は、もちろん、痛手である。しかし、悲しく大きな出来事であっても、キリストの信仰はモニュメントの貴重さに負うのではなく、人々の心に、信仰心に負うのである。火災中の多くの人の祈りを見たまえ。この姿は信者たちに多くの感銘と勇気を与え、信者でない人にも対しても感動の情を引き起こしたようだ。この出来事は、今年の復活祭の直前に起きたことである。キリストの復活の日の出来事を再確認する必要がある。最後の晩餐に集まった12使徒の面々でも、キリストが真に神の子であると信じていたのは、一体何人いたのだろうか。その12人の中にはキリストを売り払った使徒もいるのだ。結局キリストが逮捕されて、弟子たちもバラバラになってしまった。キリストは十字架上で処刑され、埋葬され、3日後に復活した。その復活したキリストに会うことによって、それまでの一連の出来事を信ずることができるようになり、彼らの信仰心も強固なものとなったのだ。弟子たちはキリストに見捨てられたのではなかった。それは信仰の黄昏を迎えたのではなく、信仰の黎明期の訪れである。つまり、神の信仰によって、未来を指向するものである。愛は死よりも強いものである。」

## 法王はローマ市役所を訪問

3月6日、法王はローマ市役所、ローマ市長を訪問した。2013年に法王に就任したフランチェスコにとっては初めての訪問だ。ローマ法王は全世界のカソリックの長であるが、また地元ローマの大司教でもあるのだ。それゆえにローマ教区官内の教会に司牧の使命として時折訪れている。法王は予定の15分前にローマ市役所に到着。ローマ市長ヴィルジリア・ラッジ女史は法王を出迎えた。市長は夫と息子を連れてきていた。法王は夫とも言葉を交わし、息子には祝福を与えていた。そして市長の執務室から望む世界一見晴らしが良いと言われる場所から、フォロ・ロマーノの遺跡、コロセウムの眺望を満喫し、20分ばかり市長室で歓談した。その時に用意された接待用の茶器、茶碗が写真に撮られ、新聞にも載ったのであるが、二つのお盆の上の鉄の土瓶、二つの普通のコーヒーカップ、砂糖、コーヒーと2枚のビスケットがあっただけである。法王を迎え、接待するのにこんなありきたりのものでいいのかと少し驚いた。

そのあと、法王は市議会ホールで150人ほどの市会議員、助役、市職員を前にして、ローマ市長の歓迎の辞を聞き、次に答礼として思うところを次のように述べた。「ローマはその誕生から開かれた街だ。2800年の長きにわたって、来るものは拒まず、すべて受け入れてきた。イタリア国内のみならずヨーロッパ各地に道を作り、各地との交流の輪を広げてきた。ローマは壁を作らず、人と人をつなぐ橋を築いてきたのである。今でも世界の人を迎え入れ、共存共榮するように導いているのである。」